美奈の瀬川に潮満つなむか

――万葉集東歌の戯笑性の一端――

遠藤　宏

万葉集巻十四（東歌）の相聞部、相模国歌の中に次に掲げる一首が収められている。

ま愛しみさ寝に我は行く鎌倉の美奈の瀬川に潮満つなむか（巻一四・三三六六）

表現されている言葉に即して、先ずざっと意をとっておく。

なんともいとしくて寝に妹の許に行く。だが、鎌倉の美奈の瀬川に今ごろ汐が満ちていることだろうか。

次に、右に同じく言葉に即して（と、繰り返しいうのは後に別の用意があるからである）もう少し歌の中に立ち入ってみる。妹の所に「さ寝に我が行く」というのだから理由・原因は明白であろう。ところがわざわざ「ま愛しみ」と断っているのは、その思いと行動が「突然の慕情」（講談社文庫本『万葉集』）であることを思わせる。「さ寝」という即目的的な表現が使われていることも、それを補強する。暮色を増して人恋しさのそぞろ募る時刻、突忽として湧き上る妹への恋情を抑制することもなく、そのまま行動へと突き走ろうと、この歌の作者はした。ところが、日常の経験に基づく生活反応が頭をかすめた。妹の家は美奈の瀬川の向う側。時は夕刻。川には今ごろひたひたと汐が寄せて水位を高くしているはずだ。それでは瀬を渡ることはできないのではないか。不安と当惑が心中に押し寄せ満ちてくる。

この歌は、溢れ出る恋情の赴くままに行動しようとする感情と、それを踏みとどまらせようとする理性的判断との間にとどまっているという態の歌であり、ある日の夕暮れ時の一回的な心の動きを表出した抒情的な作ということに、一応はなりそうである。

今、一応と記したのは、この歌を右述のように解するには問題点がいくつか存するからである。その問題点の中でも中心を占めると考えられるのが「美奈の瀬川」という川であり、結論としては当該歌に対する抒情詩的理解を否定して民謡的戯笑性をこの歌に見ようとするのだが、以下その次第を述べていく。

男が妻問いに出向くのは夕闇に姿がまぎれる時間帯と考えてよい。その時刻と満潮とが重なるのは一カ月の間に約七日間ある。鎌倉あたり（相模湾）では、三日ほど続いて第一回目の夕方の潮満があり、十日ほどの後に第二回目が来る。男が妻問いを思い立って「潮満つなむか」と当惑することになるのは一か月単位で見て稀有なことではないということになる。換言すれば、妻問いと満潮が重なるのは単なる偶然ではなく、ある程度必然性のある一般性を有していることになる。とすると、一回的な心情を上二句に考えると下三句との間に矛盾が生じることになる。そこで、上二句も実は一般性を歌っていると解したほうがよさそうだということになる。

次に、川が恋路の障害になっているという

点に関してだが、これは東歌も含めて万葉集中に類例はしばしば見られ、パターン化した発想といえる。また、満潮が妻問いの障害になっているという点に関しても、

多由比潟潮満ちわたる何処ゆかも愛しき背ろが我がり通はむ（巻一四・三五四九）

という例があって、大和では考えられないことだが、東歌ではパターンに近いといえようか。つまり、これらの点においても当該歌は一般的な心情が歌われているという度合いが濃いということになる。

そこで、美奈の瀬川に関わる問題に入っていく。美奈の瀬川は現在の稲瀬川を指すとされている。それでよいと思われる。稲瀬川は、河口は二筋に別れているが鎌倉市長谷の北に位置する大谷の山間に発し、鎌倉大仏の東を曲折しながら南流して由比が浜に注いでいる。

北条政子が伊豆から鎌倉に入る際、稲瀬川の民家に止宿したとか、範頼が平家追討使として鎌倉進発の際、頼朝がこの川辺に桟敷を構えて見送ったとか（以上、『東鑑』）、また、新田義貞の鎌倉合戦の際、この川を境いにして戦われたとか（『梅松論』）等々の事例によれば、少くとも中世には、稲瀬川はいわば鎌倉市内と市外の境界のごとく認識されていたように思われる。これを一気に上代に遡及させてしまえば、美奈の瀬川という設定には、恋路の障害としての川という意味のみではなく、他境にまたがる激しい恋の障壁としての意味も含まれていると考えられることになる。ただ、問題はなおその先にある。稲瀬川の長さは「二十町許」（『大日本地名辞書』）と記されているごとく、現在約二・四キロメートルの小流である。長さもさることながら「水幅一間許」（『鎌倉攬勝考』）というように今も極めて細い流れである。河口に近い部分は昭和初期に暗渠にされてしまったほどであるし、現在の河口は長靴でも楽に渡れる浅さである。上代の由比が浜付近の海岸線は現在のそれよりもかなり後退していたと推定されている（『鎌倉市史一』）。従って平地部を流れる個所は現在よりもかなり短く川幅も少くとも今よりは広くはなかったであろうと想定される。仮りに現在よりも広かったとしても、稲瀬川を基準にして想像すれば、汐満ちても渡れないほど深くはなかったのではないか。よしんば足許が濡れるのを厭うても、汐に左右されない丘陵部は迂回するのにさほど困難は来さない程度である。

つまり、美奈の瀬川は現実には満潮でも渡ることはできた。「美奈の瀬川に潮満つなむか」という不安、当惑は虚構と考えられる。すると一首は、渡れるのに渡れそうもないと当惑顔のポーズをとることによって、笑いが生じてくる。一首は、欲望露わな前半から後半は哄笑へと急転していくことになる。恋路の障害としての川、境界を越える恋の隔壁としての川も笑いの対象とされている。ここに東歌の戯笑性の一端を見ることになり、同時にこの歌に抒情歌とは異る民謡性を見ることにもなる。

付　本稿の後半部は、成城大学文化祭講演会（同大学万葉集研究会主催　昭和六三年一一月三日）において「万葉集東歌における諸問題について――その戯笑性と虚構性――」と題して講演した際、テーマの一事例として採り上げたものを詳述したものである。なお、右講演は同題で「成城万葉」（一二号　平成三年三月）に掲載されている。